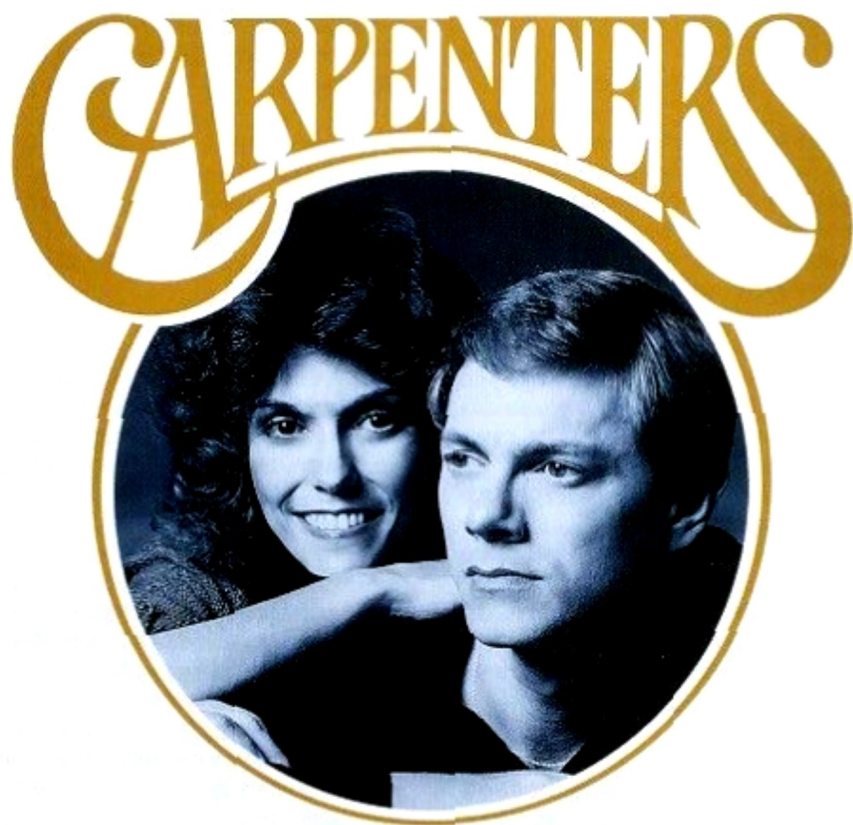


デビュー50周年を迎えるカーペンターズと
ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の奇跡の共演!!

カーペンターズの珠玉の名曲の数々に新たなアレンジを加え、
リチャード・カーペンター指揮のもと、アビー・ロード・スタジオで
名門ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団と共演した歴史的なニュー・アルバム。



WITH THE
ROYAL
PHILHARMONIC
ORCHESTRA

カーペンターズ
『カーペンターズ・ウィズ・ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団』

CARPENTERS WITH THE ROYAL PHILHARMONIC ORCHESTRA / CARPENTERS

日本盤のみSHM-CD仕様 / 日本盤ボーナス・トラック収録

2018年12月7日(金) 全世界同時発売

CD品番: UICY-15801 価格: 2,500円(税抜価格)+税

※日本盤のみの応募特典※

リチャード・カーペンターの直筆サインを抽選で10名様にプレゼント!!

詳細は、当該CDに封入されている「直筆サイン・プレゼント・キャンペーン」のお知らせをご覧ください。

【応募締切】2019年1月31日(木) 当日消印有効



カレン・カーペンター 没後35年

2019年でデビュー50周年を迎えるカーペンターズとロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の奇跡の共演!!
リチャード・カーペンターが全曲のオーケストラ・アレンジを書き下ろし、名門ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団を自ら指揮して録音した歴史的なニューアルバム!!

【アルバム解説】

①オーヴァーチュア

アルバムのおープニングを飾る、リチャード・カーペンター自らの指揮で、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団(以下RPO)と録音した導入的なトラック。「愛のプレリュード」のメロディが散りばめられた後に、続く「イエスタデイ・ワンス・モア」へと繋がっていて、イギリス人作曲家のピーター・ナイトが共同ライターとしてリチャードと共作している。ふたりの関係は、1977年にリリースされたアルバム「バクセージ」まで遡る。本作に収められた「愛に愛を(コーリング・オキユバンプ)」「泣かないでアージェンティーナ」のオーケストレーションを担当した。

②イエスタデイ・ワンス・モア

1973年に発表されたアルバム「ナウ・アンド・ゼン」に収められたアルバム・ヴァージョンから数えて、少なくとも3種類のミックスが存在する。本作ではストリングスが大幅に書き換えられ、オリジナル・ヴァージョンにはなかったアコースティック・ギターやピアノ、オーボエなども新録。1980年代にリミックスされたヴァージョンでは、冒頭Aメロ(1コーラス目)の6小節目の3~4拍目にC#7のコードが挿入され、この楽曲に新たな色合いを添えたが、本ヴァージョンでは最新の技術を利用して、2コーラス目の同じ箇所でもオリジナルのベース音(G#)を同様にC#7へとデジタル変換。より整合性の取れた編曲となった。また、オリジナルで聴かれたカレンのドラムスに追加する形で、よりパワフルな男性ドラマーも投入され、スケール感が大いに増している。

③ハーティング・イーチ・アザー

これまで発表されたミックスの違う2ヴァージョンと比べ、大編成の弦楽器の力が遺憾なく発揮され、さらに豪華絢爛な楽曲に生まれ変わった。かのハル・ブレインが叩いていたオリジナルのドラムスをグレッグ・ピソネットというドラマーで完全に入れ替え、重厚さを増した「上モノ」を後援した「屋台骨」が支えている。デジタル編集技術を使い、エンディングは劇的なカットアウトになっている。

④青春の輝き

1976年に発売されたアルバム「見つめあう恋」に収録されたアルバム・ヴァージョンと、その間4小節をミュートしたシングル・ヴァージョンが存在するが、本作はまさにその最終完成版。イントロのフルートは当初ロンドンでRPOのフルート奏者が録音されたが、満足がいかなかったリチャードは、後日ロサンゼルススタジオ・ミュージシャンで再チャレンジ。イングリッシュ・ホルンやリチャードのピアノも新録されている。

⑤ふたりの誓い

本企画でも最も劇的に生まれ変わった曲のひとつ。大編成のオーケストラの力は言うまでもないが、リチャードも自身のライナーノーツで語っているように、カレンのヴォーカルにデジタル処理を施すことにより、ノイズなどの不純物の除去に成功。清潔感に溢れる歌声が、まるで耳元で歌っているかのようだ。

⑥タッチ・ミー

アレンジャー/プロデューサーとして、リチャードの運命が如実に表れた一曲。地味なカントリー・バラードだった原曲を洗練の極みにまで昇華させている。兄妹だけによる一糸乱れぬ多重録音ハーモニーがトレードマークだった彼らにしては珍しく女性の黒人シンガーをコーラスに加えている。リチャードに理由を尋ねたところ、「ソウルっぽい音にしたかったから」と予期せぬ回答が、発売当時はディスコ全盛、パープラー・ストライプ・バンドもピーチボーイズもディスコ・サウンドに走っていた時代だ。

⑦アイ・ビリーヴ・ユー

一時のブームが過ぎ、各々の健康問題も影響する中、新機軸を打ち出す必要の中で発

表された、異色のシングル。カーペンターズとして発表された数ある楽曲の中で、外野アレンジャーを迎えて制作された例外中の例外。大編成のストリングスは、1978年に発売されたオリジナル・ヴァージョンでも聴かれたが、本作でもその威力は際立っている。

⑧思い出にさよなら

「愛にさよならを」のヒットで「パワー・バラード」というジャンルを確立させた、カーペンターズの進化系楽曲。オリジナル・ヴァージョンでも大編成のオーケストラを配っていただけに、この企画にはうってつけの楽曲と言える。ピアノは新録。

⑨メリー・クリスマス・ダーリン

元々は1970年の録音だが、本作で聴かれるカレンのリード・ヴォーカルは、1978年に発表された初のクリスマス・アルバム「クリスマス・ポートレイト」のために録り直されたもの。書き換えられたフルートのラインやホルン隊、増強された弦、さりげなく変更されたコード(おそらくこれもデジタル処理)。新録のピアノ・リチャードの執念が感じられる出来栄だ。

⑩ベイビー・イツ・ユー

確認できる範囲では、オリジナル・ヴァージョンの他にアコースティック・ピアノをエレピに差し替えたリミックス・ヴァージョンが発表されているが、この曲は本アルバムの中で「愛身率」が最も高い楽曲と言える。特に1コーラス目はオリジナルからのオケ素材はほとんど聴かれず、カレンはまるでRPOとの共演のために歌っているようだ。

⑪運かなる影

オリジナル・ヴァージョンでは10人しかいなかったストリングスが、本作では44人にまで増員。当時からリチャードの顔の中で鳴っていた音が、ようやく現実のものとなった。この曲は彼にとってまさに神聖不可侵なもので、ピアノのステレオ化はおろか、リミックスさえ1991年まで全く手付かずの状態が続いていた。本企画でそのすべてが甦り、あの名作の完全な姿が48年の歳月を経て、遂にその全貌を現したのだ。

⑫スーパースター

1971年にリリースされたアルバム・ヴァージョン、シングル・ヴァージョン、1991年のリミックス・ヴァージョンと3つのミックス違いを経て、4つ目のヴァージョンとなる。大幅に増やされたストリングスの他、同じく新録されたアコースティック・ギターやバスーンなど、この曲の持つ哀愁を過去ヴァージョンに比べて何層も磨き立てている。

⑬雨の日と月曜日は

過去ヴァージョンの实運は「スーパースター」と同じ。本アルバムの他の曲同様、リチャードにとってカーペンターズは未だ現在進行形のライフワークなのだと思わせる。新しいアイデアが次々と浮かんで来て、その進化はとどまることを知らないかのようだ。

⑭マスカレード

「やり過ぎは禁物だね」—— 今回のRPOとの共演に際し、リチャードが自らに言い聞かせるように繰り返していた言葉だ。これだけの人数のオーケストラを相手に「あれもやりたい、これもやりたい」と溢れる才気がかかって仇になる危険性を理解していたのだ。前半はほぼオリジナルの録音に忠実だが、後半、エンディングにかけて抑制的かつ効果的に現れるRPOの演奏。プロデューサーとアレンジャーという二足のわらじを両手に両立させている。

⑮涙の乗車券

1969年に発売された記念すべきデビュー・シングル。1973年のアルバム「シングルズ 1969-1973」収録のためにリード・ヴォーカルが再録され、同時に再ミックスされた。3つ目のヴァージョンとなる本作では、オーケストラの増量だけでなく、リチャードが長年溜めてきたというオーボエのパートや急激になってステレオで再録されたピアノが堪能できる。

⑯愛にさよならを

数あるヒット曲の中でも、和声の構造やドラマチックな展開など、大編成のオーケストラとの共演に最も適している楽曲。美しい旋律と相反する歪んだエレギ・ギターの組み合わせはリチャードならではのセンスだ。今回のヴァージョンではそのギター・ソロの手前であっと驚くピッコロ・トランペットが登場し、いきなりバロック時代へとタイムスリップ。引き出しの豊富さに脱帽するばかりだ。

⑰トップ・オブ・ザ・ワールド

もともとは1972年に発表された通算4枚目のアルバム「ア・ソング・フォー・ユー」に収録された一曲。ファンからの熱烈要望でシングル・カットされた際、リード・ヴォーカルを始め、スティール・ギターなど他のパートも再録され、より「シングル向き」に生まれ変

わった、その後一度再ミックスされ、これで通常4ヴァージョン目。

④愛のプレリュード

アレンジ展開の大きさをいうなら、こちらもオーケストラとの共演に最適な一曲。ピアノとフルートだけの静かなイントロから、ホーン・セクションが咆哮するサビまで、ダイナミクスに富んだ構成を盛り立てるストリングスは、まさに編曲家の腕の見せ所だ。華麗で壮大な音像がアルバムの最後を飾っている。

日本盤ボーナス・トラック

⑤ブリーズ・ミスター・ポストマン

1974年にシングルとして発売され、全米ナンバーワンを記録したが、翌年リリースされたアルバム『緑の地帯(ホライゾン)』に収録されたのは出だしリード・ヴォーカルを一部差し替えた“アルバム・ヴァージョン”。4つのコードが延々と繰り返されるこの曲をどうやってオーケストラ・スコアにするのか? 興味津々だったが、セカンド・コーラスを聴いて大いに納得。モータウンからパロッドへの編曲移動にリチャードの遊び心が込められている。

解説: 塚原 要

甘い記憶、絶対的なお気に入り、最高の新発見。

「愛のプレリュード(原題: We've Only Just Begun)」「イエスタデイ・ワンスモア(原題: Yesterday Once More)」「愛にさよならを(原題: Goodbye To Love)」。

兄リチャードが手掛ける重要な管作りと、時代を超えた妹カレンの歌声とが彩る特徴的なサウンドで、メロディック・ポップの新たな基準を打ち立てたカーペンターズ。

すぐさま大人気を博したカーペンターズは、1970年代のアメリカを代表するベストセラー・アーティストとなった。

核心を突いたカーペンターズ評はデビュー当初から上がっていたが、やがて時代を越えるにつれ、最終的には世論を形成する人々ほぼ全ての意見が一致。ローリング・ストーン誌は2017年、カレンとリチャードの業績について、「カレンの驚異的なコントラルトの歌声と、一連のカーペンターズ作品は、後々に再評価され賞賛を得てきた」と述べている。

それから約50年、カーペンターズは今もなお、世界で最も高い売り上げを誇るレガシーに数えられている。

そして今回、オリジナル・レコーディングに新規のオーケストレーションを加えて増強し、新たなプロデュースを施したアルバム「カーペンターズ・ウィズ・ロイヤル・フィル・ハーモニー管弦楽団」(2018年12月7日、全世界同時発売)がリリースされることとなった。

このアルバムは、リチャード&カレン・カーペンターの音楽を懐かしく思い出す人々、長い間愛してきた人々、そして初めて触れる人々、その全てのための作品である。

カーペンターズの物語を短編版で述べてみよう。米国コネチカット州ニューヘイヴンで、父ハロルドと母アグネスのもとに生まれ共に育った、リチャードとカレンの兄妹。熱心なレコード・コレクターだった父がニューイングランド地域の寒い冬を嫌っていたことから、1963年6月、一家はカリフォルニア州サンゼルス郊外の町ダウニーに引っ越した。カレンがドラムに夢中になり、リチャードがカレンの歌声の素晴らしさに気づいたのは、そこで暮らしていた時のことだ。幾つかのグループでの活動を通じて成功の兆しを見出した彼らは、1960年代末までには2人組・カーペンターズとなっていた。

リチャードとカレンがA&Mレコードと契約したのは、1969年4月22日。その際、レーベルの共同設立者ハーブ・アルパートは「多少なりともヒットが出るよう、願おうではないか」と述べていた。その7ヶ月後、2人はファースト・シングルをリリース。それはザ・ビートルズの『涙の乗車券(原題: Ticket to Ride)』を大膽に解体したカバーであった。ザ・ビートルズによる粗削りなロックの名曲を、華やかな管作りにプロダクションで磨き立てたパワードに置き替えたリチャードとカレン。このカーペンターズのヴァージョンは、ビルボードの全米シングル総合チャートで最高位54位を記録した。

ファースト・アルバム「オファリング(原題: Offering)」(後に作り直されて『涙の乗車券(原題: Ticket to Ride)』に収録)は、多忙なセッション・ベース奏者ジョー・オズボーンが演奏するガレージ・スタジオで当初録音していた楽曲を再レコーディングし直した曲を中心に、新曲とカバー曲を併せて収録。カーペンターズの音楽を示唆する手紙がり、つまり傑出したプロダクションとアレンジ、そして最終期を迎える寸前にあった空想的な歌声が、既にこの「オファリング」から聴いて取れる。

「オファリング」の発表後、カレンとリチャードはほぼ髪型入れずにスタジオへ戻り、次のアルバムに着手。アルパートはその際、パート・パカラック&ハル・デイヴィッドが作曲・作曲し、何年かの間しまだまっていた曲「遠かなる影(原題: They Long To Be Close To You)」をレコーディングするよう提案した。カーペンターズの2人は、何れもその選択に乗り気ではなかったものの、アルパートは、リチャードのアレンジとカレンの

奇跡的なアルト、そして2人の多重ハーモニーを以てすれば、この曲には素晴らしい可能性があるはずだと信じていたのである。そして彼は100%正しかった。シングル「遠かなる影」は、一夜にしてブレイクを遂げ、大ヒットとなったのだ。1970年7月25日、リチャードが再録した「遠かなる影」は、全米シングル・チャート初の4週連続1位を記録。これを皮切りに、カーペンターズはその後6年間という驚くべき年月にわたって、トップ20ヒット・シングルを連発し続けた。そのヒット・シングルには、「ふたりの誓い(原題: For All We Know)」「雨の日と月曜日は(原題: Rainy Days And Mondays)」「スーパースター(原題: Superstar)」などの名曲が含まれている。

カーペンターズは、3度のグラミー賞と、アメリカン・ミュージック賞を受賞。コンピレーション・アルバム「シングルス1969-1973(原題: The Singles: 1969-1973)」が全米アルバム総合チャート(ビルボード・トップ200)を制覇したほか、3枚のシングルが全米シングル総合チャート(ホット100)で1位を獲得した。世界的にも2人は非常に大きな成功を収め、1974年の日本ツアーでは、ビートルマニアに匹敵する熱狂的なファンを惹きつけている。

リチャードとカレン・カーペンターは、紛れもなく、世界の頂点(=「トップ・オブ・ザ・ワールド」)に立っていた。

それでも1971年から1975年にかけて、800公演以上のコンサートを行っていた2人。それはどんなアクトにとっても、仰天に値するライブ数だ。ましてや彼らは、最終にまで着たプロデュースを施した、目が眩むようなスタジオ・レコーディング作品を最も得意とするアクトであるのだから、尚更である。

ツアーとレコーディングの両面でカーペンターズに対する需要は非常に高く、2人にとってそれは個人的に大きな負担を強いるものであったが、それでも2人はヒットを飛ばし続けた。

1976年12月には、カーペンターズ初のテレビ特別番組「The Carpenters' Very First TV Special」がニールセン社の視聴率調査で6位にランクイン。それによりABCネットワークと契約が結ばれ、更に特別番組が4つ制作された。レコーディング・スタジオに戻ったカーペンターズは、1977年に発表した実験的なアルバム「パッセージ(原題: Passage)」で、作業を一新。同作に収録された別世界を思わせるクラットの「星空に愛を(コーリング・オキュパント)」(原題: Calling Occupants Of Interplanetary Craft (The Recognized Anthem Of World Contact Day))の壮大なカバーは、世界各国でヒットとなった。また「パッセージ」収録のジュース・ニュートンとの共作曲「スイート・スマイル(原題: Sweet, Sweet Smile)」は、カーペンターの曲としては初めて全米シングル・カントリー・チャートでトップ10入りを果たしている。

その1年後、カーペンターズにとって最大級となるヒット作が世に送り出された。ホリデイ・シーズンを一瞬にして鮮やかに飾った名曲「メリー・クリスマス・ダーリン(原題: Merry Christmas, Darling)」のシングル・リリースから約8年後、待望のクリスマス・アルバム「クリスマス・ポートレート(原題: Christmas Portrait)」が発売されたのだ。このアルバムは今もなお、毎年ホリデイ・シーズンを迎える度に高いセールスを上げている。

リチャードが長らく切望していた休暇を取っている間、カレンはニューヨークに向かい、プロデューサーのフィル・ラモーンと共にソロ・アルバムに着手。しかしA&Mがあまり熱意を示さなかったため、このプロジェクトは横上げされることとなった。やがてカーペンターズはスタジオに復帰し、アルバム「メイド・イン・アメリカ(原題: Made in America)」を完成。1981年にリリースされた同作からは、2人にとって最後の全米トップ20シングルとなった「タッチ・ミー(原題: Touch Me When We're Dancing)」がリリースされた。またカーペンターズは、ビルボード・アダルト・コンテンポラリー・チャートの1位に15度輝いたが、これはその最後の1枚となっている。

カレンは神経性無食欲症の合併症により、1983年2月4日、この世を去った。

リチャードは歩みを止めることなく前進を続け、カーペンターズのアルバム未収録曲を集めたコンピレーション・コレクションを更に4作制作し、カーペンターズの再発盤や、その他のカーペンターズ関連プロジェクトを監督。また自身のソロ・アルバムも2枚リリースし、遅ればせながらカレンのソロ作品を監督したのに加え、他アーティストのアルバムや楽曲のプロデュースを担当。新に聴かれてコンサートも行っている。

リチャードは2018年の大半を、アルバム「カーペンターズ・ウィズ・ロイヤル・フィル・ハーモニー管弦楽団」の制作に費やしてきた。彼はカーペンターズのオリジナル・レコーディング音源に新規のオーケストラ・アレンジを加えただけでなく、壮大な音像(オーヴァージュア)と曲間の間奏(インターラード)も新たに作曲。8月にはロンドンのアビイ・ロード・スタジオで、ロイヤル・フィル・ハーモニー管弦楽団とのセッションを指揮した。その後、ロサンゼルス市のハリウッドのキャピトル・スタジオで、異なる録音とポスト・プロダクションが行われている。

リチャードと妻メアリーは、カーペンター・ファミリー財団や、ウェストレイク・ビレッジのカーペンター・ファミリーシアター、そしてカリフォルニア州ロング・ビーチのカリフォルニア州立大学リチャード&カレン・カーペンター・パフォーマンス・アート・センターなど、様々な慈善活動にも忙しく取り組んでいる。

リチャード&メアリー・カーペンターは、サザン・カリフォルニアのロサンゼルスにほど近い郊外に在住。2人の間には5人の子供がいる。



CARPENTERS



WITH THE
ROYAL
PHILHARMONIC
ORCHESTRA

『カーペンターズ・ウィズ・ ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団』 カーペンターズ

CARPENTERS WITH THE ROYAL PHILHARMONIC ORCHESTRA / CARPENTERS

2018年12月7日(金) 全世界同時発売

CD品番: UICY-15801 価格: 2,500円(税抜価格)+税

日本盤のみSHM-CD仕様 / 日本盤ボーナス・トラック収録

【収録曲】

1. オーヴァーチュア
Overture (Richard Carpenter / Peter Knight)
2. イエスタデイ・ワンス・モア
Yesterday Once More (Richard Carpenter / John Bettis)
3. ハーティング・イーチ・アザー
Hurting Each Other (Peter Udell / Gary Geld)
4. 青春の輝き
I Need To Be In Love
(Richard Carpenter / John Bettis / Albert Hammond)
5. ふたりの誓い
For All We Know (Fred Karlin / Robb Wilson / Arthur James)
6. タッチ・ミー
Touch Me When We're Dancing
(Terry Skinner / J.L. Wallace / Ken Bell)
7. アイ・ビリーヴ・ユー
I Believe You (Dick Addrissi / Don Addrissi)
8. 思い出にさよなら
I Just Fall In Love Again
(Steve Dorff / Larry Herbstritt / Gloria Sklerov / Harry Lloyd)
9. メリー・クリスマス・ダーリン
Merry Christmas, Darling
(Richard Carpenter / Frank Pooler)
10. ベイビー・イツ・ユー
Baby It's You (Burt Bacharach / Mack David / Barney Williams)
11. 遙かなる影
(They Long To Be) Close To You
(Burt Bacharach / Hal David)
12. スーパースター
Superstar (Leon Russell / Bonnie Bramlett)
13. 雨の日と月曜日は
Rainy Days And Mondays (Roger Nichols / Paul Williams)
14. マスカレード
This Masquerade (Leon Russell)

15. 涙の乗車券
Ticket To Ride (John Lennon / Paul McCartney)
 16. 愛にさよならを
Goodbye To Love (Richard Carpenter / John Bettis)
 17. トップ・オブ・ザ・ワールド
Top Of The World (Richard Carpenter / John Bettis)
 18. 愛のプレリュード
We've Only Just Begun (Roger Nichols / Paul Williams)
- 日本盤ボーナス・トラック
19. プリーズ・ミスター・ポストマン
Please Mr. Postman (Garrett / Holland / Gorman / Dobbins / Bateman)

Produced by Richard Carpenter
Associate Producer: Nick Patrick
Orchestra performed by The Royal Philharmonic Orchestra
Conducted by Richard Carpenter
The Royal Philharmonic Orchestra recorded by
Haydn Bendall at Abbey Road Studio 2, London, U.K.



NOT FOR SALE

